



高 佐 師 朝 規

ご あ い さ つ

鵜 戸

発行者兼編集者
 鵜 戸 神 宮
 社 務 所
 印刷所
 西 日 本 印 刷

暑中御見舞申し上げます。

「暑さ殊に酷しき折から御自愛の程御祈り致します」

昨年は御即位の礼、大嘗祭等の祭儀が滞りなく齋行され、又本年二月二十三日、浩宮徳仁親王殿下の立太子宣明の儀が行われました事は御国の隆昌と、皇室の弥栄えと共にお慶びに堪えない次第で御座います。

当神宮におきましても数々の記念の事業を遂行する事が出来まして、正月より参拝者は股賑を極め、例祭に引続き剣道大会、三月のシャンシャン馬道中唄全国大会、又全国より応募されました代表の騎馬による花嫁姿のシャンシャン馬道中鵜戸さん詣りと盛大に開催されました事は偏に、氏子崇敬者の方々の御協力の賜と厚く御礼申し上げます。

尚、本年は末社の御改築工事、塗装等を予定して居ります。

当神宮は十二万坪余の境内を有し、海岸に突出した風光明媚な地ではありますが、塩害を始め台風の被害も多く寸時のゆだんも許されません。

今後も職員一同、協力一致精進致し神宮の発展と、御神徳の昂揚に努めたく所存でありますので此の上とも一層の御力添賜ります様御願ひ申し上げます。

尚、氏子崇敬者皆様方の御繁栄と御多幸を祈念申し上げます御挨拶と致します。

例祭齋行と奉祝行事

二月一日午前十一時より、当神宮例大祭が献幣使黒岩龍彦氏（県神社庁々庁）参向の元、厳肅かつ盛大裡に齋行された。

当日は絶好の晴天にも恵まれ、責任役員、氏子、崇敬者総代をはじめ、四神宮（英彦山、霧島、鹿児島、宮崎）宮司、県内外神社、官公庁関係、日南市、北郷町、南郷町各地区々長、全



舞楽 “納曾利”

国各地の崇敬者の多数の参列を賜った。

式典には昨年に続き舞楽「納曾利」が神宮の職員によって奉納され、厳肅の中にも華やかさをかもし出していた。

奉祝行事として儀式殿前広場では、第十九回鶴戸神宮奉納四半的弓道大会が開催され、八二チーム、三八二名が参加し和やかな雰囲気の中にも白熱した競技が行われた。

又、二月三日の日曜日には、第三十八回剣法発祥鶴戸山剣道大会と同じく儀式殿前広場で開催され、一六八チーム、一四九七名の参加のもと、息詰まる熱戦が終日繰り広げられ、鋭い掛け声が速日峰に木霊していた。

尚、四半的、剣道大会の成績は次の通りである。

▽四半的大会）
〔団体〕
▽一般①南②大宮③門川



▽高齡①大宮②服部道場③ 鈺肥

〔個人〕
▽一般男子①押川俊武（えびの）②長友信一（田野）

③金丸有男（服部道場）
④吉野邦彦（田野）⑤山田勇美（大宮）

▽高齡男子①荒川速（鈺肥）
②安井秀義（田野）③三輪祭（三財）④谷山道義

（小林）⑤川西克巳（三財）
▽一般女子①馬場セツミ（中郷）②野崎ハツ子（田野）③横山チサ（三財）

④竹山アヤ子（服部道場）
⑤大原ヒデ子（大宮）

▽高齡女子①中山ナミヲ（中郷）②前田玉子（山之

口）③吉川ハルエ（沖水）
④殿所ミヨ（小林）藤山ヒサ子（田野）

〔剣道大会〕
〔男子団体〕
▽一般①機動隊（宮崎）② 都城自衛隊（都城）③ 24 普通連（同）、日南警察署（日南）

▽高校①宮崎北高校（宮崎）
②宮崎日大高校（同）③ 日章学園高校（同）、日南高校（日南）

▽中学①神武館（宮崎）② 北辰館（同）③朱雀館道場（同）、延岡修道館（延岡）

▽少年①上長飯剣友（都城）
②修道館（延岡）③朱雀館道場（宮崎）、至誠館（延岡）

〔女子個人〕
▽一般・高校①尾前ゆいか（鵬翔高）②田中美穂（宮崎北高）③堅田知穂（同） 坂元千穂（同）

▽中学①白ヶ沢真美（輝星）
②那須史織（椎葉中）③ 野田志保（玄武館）、脇本華奈子（高鍋東中）

▽小学①児玉美佳（稲門館）
②甲斐寿子（玄武館）③ 甲斐直美（通山少剣）、 児玉由香（上長飯少剣）

去る五月二十日午前十一時より、別当宮司先賢慰霊祭が齋行された。この日は、生憎の雨となり、祭場を鶴戸山別当墓地より当神宮儀式殿にうつし、歴代別当宮司遺族、責任役員、氏子総代をはじめ多数の参列者のもと、厳かに執り行われた。同祭は戦後、第六代後藤



別当宮司

先賢慰霊祭

第五回シャンシャン馬道中唄全国大会 開催とシャンシャン馬道中再現

宮司の時から神仏合同慰霊祭として行われている。宮司の祝詞奏上の後、願成就寺住職川崎光俊氏、潮

この唄は、昭和三十年に奈須美静氏が「シャンシャン馬」と称する古謡を一部改め、「シャンシャン馬道中唄」として作曲されたものである。そして、全国的に愛唱され始め、昭和六十二年に第一回シャンシャン馬道中唄全国大会が開催される運びとなり、今年で早五回目の全国大会となった。

大会は三月三十、三十一日の両日行われ、少年、青年、壮年、実年、高年の五部門に分れて競われた。初日は日南文化センターで予選があり、県内はもとより九州各県、遠くは茨城県などから合わせて四百五十余名が参加し、自慢の喉を披露した。二日目は会場を鶴戸神宮儀式殿に移し決勝大会が行われ、三味線や尺八、太鼓の音に合わせ、声高ら



かに歌い上げた。会場には、民謡愛好家や一般参拝者が所狭しと入り唄の終わるたびに割れんばかりの拍手を送っていた。尚、各部門の入賞者は次の通り
▽少年の部
①鎌田泉（日南）②林美智子（南郷）③久保田やよい（宮崎）

満寺住職伊勢木俊真氏、王楽寺住職甲斐芳文氏が経を奏し、御詠歌などの法要がいとなまれた。

▽青年の部
①谷口とも子（宮崎）②藤崎千春（小林）③末広喜代美（延岡）
▽壮年の部
①小淵恵子（宮崎）②日高美智子（日南）③原口公臣（えびの）④細川義友（日向）⑤大田原アサエ（宮崎）⑥木下信子（串間）
▽実年の部
①甲斐圭子（延岡）②菊池芳盛（日向）③平石ヒサ子（日南）④三尾末広郷）⑤甲斐クニ子（西郷）⑥松下セツ子（延岡）
▽高年の部
①守田カヨ（日向）②荘子照子（日南）③山本克美（新富）

〔特別賞〕
▽少年の部
榎木美香子（茨城）
▽青年の部
田浦礼子（熊本）
▽壮年の部
内田清（佐賀）
▽実年の部
黒羽喜美子（茨城）
▽高年の部
水谷綾子（太宰府）
又、同大会に合わせて「シャンシャン馬道中を再現

祖先の生まれ変わり

権祐宜 永友 謙 二

近頃、まわりの人達に二才になる娘を見て「本当にお父さんにそっくり」とよく言われる様になりました。まだ二才なのに私に似るとは嬉しいやら悲しいやら、一抹の不安を感じてしまします。しかし私の子であるから似るのは当然の事、父母は人の本なり「子供は親の生まれ変わりであるのですから。この世の中、万物すべて



本門真悟・八起御夫妻（宮崎県）である。

齋行されます。それに伴い「わたしたちのお伊勢さま」御遷宮は世界の宝」など各先生方が本を出版なされていきます。そしてその中に「生まれ変わる」という事の意味、大事さが色々書かれています。

その中で私が一番印象づけた部分で引用しますと「不死不滅の全能神の永遠性は、観念的には完璧に見える。しかし、完璧なはずの永遠性は、生命の現実界には実在しない。わが神道の第一義は、天地自然のいとなみに素直に順応することにある。わが国民は、生命の永遠性を、自然のいとなみのままに、非連続で、しかも連続する、矛盾の統合のなかに見出した。」とあります。

考えれば考える程難しい問題になってきましたが、生まれ変わるという事は、永遠の命を維持するためであり、祖先と一体化する事であり、又原点へ返り、白紙に戻り、そして再び出発、甦るといふ事ではないでしょうか。

れば生まれてきません。またその親にもそれぞれ二人の親がいなければ生まれてきません。この様に過去を遡ってみますと、二八代で既に一億人という祖先が必要となってきます。この中の一人でも生まれて来なかったら一人の人間というものは無いのです。

鵜戸山玄深記(五)

石窟不動尊長日護摩

當山石窟ニ護摩堂在リ本尊ハ興教大師之作不動明王也寺院中常ニ怠ル事ナク毎朝後夜日供之護摩ヲ修行ス是則國家安全御武運長久諸人快樂之秘密場也案スルニ不動尊護摩供之秘法力ニ依テ神明モ威ヲ増シ玉フト見エタリ其ノ證據ヲ陳レハ高野山天野明神弘安四年四月五日同十二日訖宣ニ曰日本國中諸神蒙古ヲ征センカ爲ニ九州ニ發向シ玉フ議定既ニ畢ス仍テ不動明王火界之真言ヲ唱エテ神之威光ヲ増スヘシト云泉シテ其後異域之賊船幾千ワト云ヲ知ラス海上ニ充滿スルノ由鎮西之早馬関東ニ到來スルト云エリ具ニハ名靈集ニ是ヲ載ルカ如シ其時勅ニ曰高野之衆徒モ太宰府ニ行向フテ兼日之訖宣ニ任セテ不動明王之法ヲ修シ

祖先があつての自己であります。祖先に感謝し、敬うのが私達の本義であり、祖先が培ってきた精神、伝統を守り伝えていくのが私達の生まれ変わりに残していかなくてはいけないものだと思ひます。なぜなら私達は祖先の生まれ変わりののですから。

火界之真言ヲ誦シテ益々明神之威光ヲ助ヘシト云依之弘安四年七月朔日蒙古之賊船一時ニ破砕シ十萬之將卒悉ク海中ニ没溺スト云ヘリ應知當山石窟之護摩堂モ日々神明之威光ヲ増シ國家安全諸人快樂之冥助ヲ當神明ニ祈奉ラシカ爲ノ日供護摩也努々日供之護摩ヲ簾末ニ修スヘカラス又當山ニ不動力石窟ト云アリ是法爾自然ト神明威光倍增之名稱ナラン亦榎原山神女之御筆ニ不動明王石窟ト書セ玉ヘリ是榎原山地福寺之寶物也誠ニ以テ神慮之冥鑑思ヒ合セテ仰キ尊フヘシ野山名靈集ニ云頃日之神學者ハ古來、神宮之風ニ背テ動スレハ云フ我國之諸神ハ佛法ヲ諱玉フト既ニ類聚國史(菅原道真)ニハ明ラカハ幡宮之神願ヲ記シ續日本後記ニハ日吉之神ノ佛法結縁之訖宣ヲ載タリ又天滿宮之神宣ニ我無失之罪ヲ得テ歎キ悲ミシ涙ヲ以テ化シテ大水トナシテ日本ヲ漂没シ八十餘年ヲ經テ後重國土ヲ成立シテ我住處トセント思ヒシニ既ニ此國ニハ大日如來之真言教法熾ニ天下流布シテ國家ヲ鎮押シ萬民ヲ擁護ストモ亦彼ノ法ヲ尊テ受持セシカ故ニ大ナル災ヒヲナサスト扶桑略記ニ見ヘタリ偏黨之九情ヲ以テ神慮之幽邃ヲ計ル事勿レト此事誠ニ以テ唯一家偏學之輩之警戒也

①本尊—供養・礼拝の対象とされる主尊像

- ②興教大師—真言宗中興の祖覺鑊(一〇九〇—一四三三)の事
- ③護摩—密教において爐中に火を燃やし供物を焼いて聖尊に供養する修法・智慧の火で煩惱・一切の悪業の薪を焼きつくすことを意味する。
- ④蒙古—元軍の事
- ⑤不動明王—色黒く眼を怒らし、両牙を咬み、右手に降魔の劍を持ち、左手に絹索を持つ。
- ⑥火界之真言—火界呪の事か。密教修法の一。印を結び、無量の大火焰が流出するのを觀想しながら唱える呪文
- ⑦異域—元(中国の国号の一)
- ⑧兼日—期日より以前の日
- ⑨破砕—やぶりとくなくこと。
- ⑩將卒—將校と兵卒。將兵
- ⑪冥助—目に見えない神仏の助力
- ⑫日供—毎日仏に供物をする事。またその供物
- ⑬法爾自然—自然法爾の事か・他から何の力を加えられることなく、一切の存在はおのずから真理にかなっていること
- ⑭冥鑑—眼には見えないが、神仏が常に衆生を見て守護すること
- ⑮類聚國史—勅撰の史書 八九二年成る
- ⑯續日本後記—六國史の一。日本後紀の後を承け、仁明天皇一代一八年間の編年体の史書。八六九年成る
- ⑰結縁—仏道に入る縁を結ぶこと。
- ⑱漂没—ただよいしむむこと

彌陀如來も觀世音菩薩も、それどころか不動

明王も天童八部衆も、みな大日如來の特性の一つを表現しているものにすぎないという。これは大日如來が仏のなかの仏とでもいうべき、最も普遍的な性格をもった仏であるときれたためである。

- ⑲受持—心にさとして忘れないこと
- ⑳幽邃—景色などが物静かで奥深いこと
- ㉑警戒—教えいましめること

シヤンシヤン馬道中について

主典 神崎直則

旧曆の三月十六日には若草の萌ゆる七浦七峠から宮崎街道にかけて盛装の花嫁を乗せた馬の群れが、鈴をシヤンシヤンと音も軽く行列をなしつつ絡繹として続いてきた。これは鵜戸詣りの帰路であり新郎新婦の晴れの新婚旅行であった。この宮詣りの日程は地方地方によって多少異なるのだが、旧三月十六日に帰るよううに予定を立てる。宮詣りをして帰りの最後の宿で嫁女は化粧を直し髪を結い衣服を着替える。親戚や講中の人も多くは、この宿まで出向いて迎え宴を開くのが常であった。嫁女の服装は単衣の着物

い。鵜戸詣りは日向は勿論、薩摩、大隅の男女は殆んど義務的に履行していたのである。近郷の男女は六、七歳迄には必ず参詣し、これを初詣と称していた。若し十余才になっても参拝しないような者があると人々はこれを賤しめていたくらいであったそうである。今年の三月三十一日に行われたシヤンシヤン馬道中唄全国大会も今年で五回目を数えた。老いも若きも平素の練習の成果を存分に発揮し歌い上げる。昼迄儀式殿内にはシヤンシヤン馬道中唄の歌声が響き渡り、やがて境内には往年のシヤンシヤン馬道中の装いをした新婚夫婦が登場し恰もタイムスリップした心地がある。このようにこの大会は道中唄を通じて、貴重な文化遺産の継承と道中唄の保存普及に寄与しているのである。永遠に継続されることを期待したい。

鵜戸さん参りは春三月よ 参るその日が御縁日 参りゃとにかく帰りの節は つけておくれよ青島へ



大鳥大社宮司 山本博之氏他

一月一日 歳旦祭
 一月三日 元始祭
 一月八日 福岡高等検察庁 検事長細谷明氏 他五名参拝
 一月九日 日南地区交通安 全祈願祭
 一月十二日 宮崎市生目神 社宮司高妻和夫 氏他十一名参拝
 一月十八日、十九日 九州 地区別表神社宮 司会出席の為宮 司福岡県へ出向
 一月二十三日 大鳥大社宮 司山本博之氏他 職員六名参拝



宇夫階神社宮司 宮本守也氏他

一月二十八日 箱根神社祢 宜香取辰夫氏参 拜
 二月一日 例祭
 二月五日 鶴戸稲荷神社例 祭
 二月九日 香川県宇夫階神 社宮司宮本守也 氏他四十四名参 拜

二月十一日 紀元祭
 二月十三日 大鳥大社宮司 山本博之氏他職 員六名参拝
 二月十四日 広島東洋カ ー プ必勝祈願祭

二月十七日 祈年祭
 二月二十日 豊国神社田中 権弥宜御夫妻参 拜
 二月二十三日 立太子の礼 当日祭
 二月二十五日 能楽観世流 大槻文蔵氏他三 名参拝
 二月二十六日 日向市五十 猛神社宮司巻岐 秋吉氏他五名参 拜
 二月二十七日 日向市栗尾 神社宮司巻岐和 史氏他十三名参 拜
 二月二十八日 宮内庁桃山 陵墓監区陵墓監 三木宏和氏他三 名参拝
 三月一日 徳島県丹生八幡 神社宮司丹生皓 久氏参拝
 三月六日 九州管区警察局 々長樋口武文氏 他五名参拝
 三月十六日 責任役員会
 三月十八日 宮内庁陵墓課 長福嶋一郎氏他 八名参拝
 三月二十二日 宮内庁秘書 課山田享氏他二 名参拝



田村神社宮司 田村勝則氏他

三月三十一日 シャンシャ ン馬道中唄全国 大会決勝 シャンシャ ン馬道中新婚三 組参拝
 四月九日 伊勢神宮祢宜 本城美臣氏他一 名参拝
 四月二十七日 責任役員会
 四月三十日 総代会
 五月五日 節句祭奉祝行事 いさみ太鼓奉納 神靈佛教会会祖 国井君姫氏他参 拜
 五月六日 滋賀県田村神社 宮司田村勝則氏 他六名参拝

五月二十日 别当宮司先賢 慰霊祭



鎮守氷川神社宮司 鈴木邦房氏他

五月二十三日 鎮守氷川神 社宮司鈴木邦房 氏他五十九名参 拜
 六月三日、四日 敬神婦人 会研修旅行(福 岡方面)
 六月十日、十三日 職員研 修旅行(新潟方 面)
 六月十七日、二十日 職員 研修旅行(新潟 方面)
 六月三十一日 大祓式

社務日誌抄



東元水産 東元勇一氏他

鶴戸さんよいとこ一度は おいで
 一目千里の灘がある 行こか参ろか七坂越えて 鶴戸神社は結び神

社務所の上に倉稲魂神を 奉祀する稲荷神社(末社) があり豊年満作、漁業、商 売繁昌の守護神として信仰 が厚く参拝者も多い。
 この社は、神宮の記録に よると、安政五年(一八五 八年)二月に京都の伏見稲 荷神社から、稲荷大明神を 勧請したとある。
 近年、鳥居を奉納される 崇敬者も増えつつあり、報 告祭も当神宮職員によって 厳粛に斎行されている。

鶴戸さん参りに結いたる 髪も 馬にゆられて乱れ髪 音に名高い背平の峠 坂は七坂七曲り

尚、今年より奉納された 方々のお名前を掲載させて いただきます。
 鳥居奉納者
 ▽平成三年二月二十六日 日南市 東元水産 東元 勇一様
 ▽平成三年四月二十六日 大津市 浜田泰介様(画 家) (代参) 株橋百貨店 外 商部部長 下西武則様

鶴戸稲荷神社鳥居奉納

新職員紹介



株橋百貨店外商部部長 下西武則氏他

生年月日 昭和四十六年三 月十四日
 最終学歴 国学院大学別科 神道専修Ⅱ類
 趣味 ドライブ・音楽鑑賞
 常の信条 忍耐



出仕 日高鉄弥

生年月日 昭和四十七年六 月十八日
 最終学歴 日南振徳商業高 等学校
 趣味 バスケケット
 常の信条 努力



巫子 藤浦美樹子

生年月日 昭和四十八年二 月十日
 最終学歴 日南高等学校家 政科
 趣味 剣道
 常の信条 エクセルショ ー



巫子 矢野悦子

生年月日 昭和四十七年四 月八日
 最終学歴 日南学園高等学 校商業科
 趣味 お菓子作り
 常の信条 素直



巫子 酒井直子

生年月日 昭和四十七年十 月二十七日
 最終学歴 日南学園高等学 校医療科
 趣味 テニス
 常の信条 誠実・礼節



巫子 鶴田智子

いさみ太鼓奉納

五月五日のこどもの日、揃いの鉢巻、法被姿の地元の子供たち五十名が、鵜戸の大神様と祖先の恩とに感謝すると共に、健やかな成長を祈り御本殿、儀式殿前広場に於いて勇壮な「いさみ太鼓」を奉納した。

このいさみ太鼓は、昭和天皇御在位五十年を記念して創作されたものであり、当神宮下の磯に打ち寄せ砕けちる荒波の様子を大小の太鼓、笛、鈴等で表現している。これに合わせて獅子



舞が行われ、毎年この日に奉納されている。

この日は少し肌寒さを感じずも絶好の五月晴れとなり、又、G・W期間中ともあって参拝者も多く、元気に太鼓をたたく子供たちや、三体の子供獅子の舞いをさかんにカメラに収めていた。

一本杉の根元 幹・枝を保存

推定樹齢八百年、高さ四十二、五メートル、幹回り六、七メートルで神木と称され、境内の新駐車場の側にそびえていた一本杉が、昨年の台風で根元から五メートル程のところで折れた。当宮では貴重な杉として、根元と幹は元のところで、枝は社務所にて保存する事にした。



当神宮宮司、

責任役員

関屋武義氏

表彰される



五月二十三日、明治神宮会館にて開催された神社本庁設立四十五周年記念大会にて、宮司が五十年以上勤務の神職として又、責任役員関屋武義氏が神社の総代又は責任役員にして功労顕著な者として表彰された。これは御大典並びに神社本庁設立四十五周年記念として表彰されたものである。これは共に永年の功績が認められたものであり、当神宮としても、大変光栄な事である。

編集後記

私たちは神社にお参ります

る時、古来からの約束事のように、手水舎で柄杓にて手を洗い口をすすいでいます。何故かと申しますと、手水は裸の簡約に他ならないからです。裸は神代、伊耶那岐命が黄泉国の穢を祓い清める為に、筑紫の日向の橋の小戸の阿波岐原で水中に入り身を清められたことに始まります。又、命の裸は海中で行なったと考えられている為、潮で穢を除くとされています。

又、柳田國男翁の「忌と物忌の話」の中等にも「日本人は元来、海水に特別な意味を認めていて、その考え方は今もまだ伝わっている。海の水は、無尽蔵の水であり、その末は天に続いておりかつ絶えず来たり代っている。これに触れば何物をも洗い浄めると思っていたのも自然であった。又、流れる水の清さもまた大いなる力の分れと見た」とあります。

これらの事からも、私たちは手水の意義をしっかりとして踏まえ行なう事が肝要かと思いますが、皆様はどうお考えでしょうか。